

七部集大鏡

猿
蓑
四

中村俊定文庫

文庫 18

999

5

2 3 4 4 5 6 6 7 7 8 8 9 9 10 10 11

猿蓑

ひ左古

續猿蓑





猿蓑

信濃仰九撰釋

飯詰の集法は古より古今より小なり
愚考轉文曰人不通古今馬牛而如襟裾
をいとく百人一肩を並べりあもそのは振
阿の巻頭を食なり解しを天智帝を
格別の法ありしなり巻軸を慶帝を
うら位の内製なり二を女帝よりして夜
なり宴ふ夜食位の三の巻人とし上
なるき大切のりありしなり
さて信陽合体系一夜食位の三の巻りぬき

ハ恋の歌なり解し人丸を相親の巻よりして
人及の大事人情の宴次よる花より月
雪の巻終是又裁節の大事なり解し人
歌の二巻とすえり赤人なり解し
沃も阿の一巻とすより解し
よ及ふ所を志す一飯詰の集法は
むとありし族此境第一味す
その古今ありしりて依違の書ありて古
今ふやてる所を解し
一をりて今を解すといふをりて
古一を解すといふをりて又歌号を
初の巻標ちりては是又むて大切なり七
部ふ五巻の法ありしなり
是等のおきて起しし時ありしなり

一書に挙白集大相好好をもあへ大に
のり、長秋の色くあつて思ひし平好し
はるまじらほらちすやうみもあつて
おりの心謀ふ月花もおもておるや
きつ好るきつや

不変此意を志し心

愚考いふは流ひすも正徳の根をこ
くはして正徳するの益徳の全くむ
あふのまよとるなり

五徳をいふ及ん人心をよるなり

一書よ兵法よ将の五徳あり不徳者剛法量
度是なり 一書よ徳之曰徳徳は速
の和よ五つありなり、あつていふ、
一、みちなり一

信徳をいふなり二自謙し徳りて
をいふなり三なりあつて無と信す
るなり初心の案学いなりして初
の浦るなり心とよせ徳るなり
古事、来歴文明なり一白よ
なり徳るなり引よせつて附
是五つの徳るなり 愚考五徳をいふ
よ及ん心とよし心とよし書
やうの徳りなりあつて徳
えり勝るなり書して徳り
一信徳をいふなり徳り
一、自謙し徳りなり
とるなり徳り見識るなり
自謙、其の集ありなり

いづれも終末の集め序番子々名をとりて
字もつて翁の稿なりは又の書せる人々の
人し何と見えぬや 愚考の末をめぐ
翁の自筆と被小向雲竹を学ひまゝ
てとて學ぶところあり

初志られ様も小集を不しと云ふ

古注よ曰定家卿條とめて存らば白井の書
ひつゝの之不しの不しと云ふことあり此歌の
上人雅居士歌鳥帽子とりしりゆのを思
て小集を辨るるなりと云ふことあり
手記をよみねりて小引巻を更けてよみま
るる翁のそとを云ふて様の人を初といふ
るが初集は小集を云ふと云ふ人々と様を
しるすべしなり

阿達守と阿達守の夜の鐘の音

一書よ小集の白を此集の父よりしては
白をぬるり次ししの白を産出するなり
阿達守と阿達守と心とぬるる鐘の音を姑
蘇城守のよやとせと云ふ建三井の鐘とい
きつゝと云ふなり

阿達守と阿達守の夜の鐘の音

一書よいそとを湖氷より魚のりて一名
知と夫古人の云湖多ふりきりておと云
身人々名と云ふけぬく湖田は橋

愚考金葉集身人々ひえ山おろしと云ふ
来りてと云ふことあり湖田は橋の歌を
漆取しりてけけぬくと初はと云ふ
阿達守と云ふは余の橋よりと云ふの記こ

矣是延七日化云々て是斗て茶
の花やといひ少くは説く一説も夫思
女を醜なりしりててを妙諷なり
白のさきを和事始ふ云陳晦伯之天中記
又曰凡種茶必下實移值則不復生
故聘婦必以茶為礼固有取也
あそを身信儀まては瓶の开やげを茶と
等なり是女を一度嫁しては必二夫
よ思ふはといひ約ふ茶をてりて礼とす
茶を實をへてて二度植置り
けり必枯りしり夫思女を父よ陰て
得ふ所なり一嫁する中ハ勿論列女なり
を連ハ行も娶らむといひ人のなきを
んり人なきこと終つ終ふ終りなり

一度も嫁をさるる花なり一度嫁するハ
実なり安ふ茶の花や。曾えまて
の余此越人の為よい片も揚を被るや
又年を病む

兼出れ茶の花や一おむをり

愚考後多の院の出付とや西の系よ
夫なりよまき梅の香々連ハ肉よりその梅
やいをよと詠ありて連ハ女一首の歌を
詠す初る連ハいよと一考は茶
をよとていりあへて帝は歌のなり
一くりを連ハそのり止り人り伊歌詠送
集に見ゆゆ一よ考茶梅とてやり
て古よりよよるとをり一ふうめを考の
ありよめててくみのむ一を考

くして華の花ゆふをくらまらるるそやと
るり家もろるとりりの別さるるをを
る

牡丹の花の美 裸

愚考因機法伝ふ冬牡丹の待敷色却
因風露深英華不畏雪霜欺

暇月もるゆくうんう亥子い

愚考雜五行書曰十月亥日食候令人無病
又亥八十二月小子をる守りのる連八女多
く祓ふと么く又大成経小曰亥月得亥天
照太神幸魂大祓爰後智恵る乃天地
爰候已降形地爰以五色解并五色
幣及甘辛酒五味菓等 減糲粟之國
災皆消國祿悉致と么く類聚國史曰

同化帝十月但列より初て候とて秋す
婿の亥るまは十一月よりふるりあり
餅といふん熱向よしと暇月もるゆ
くとる候の字よ力あり

祓逆水はまのるの夜

愚考杜荀鶴の白ふ張路於音 夜
過山といひふるをりては山ありての
吟るる必定るり禁秘抄曰伴於大
有無物也或六角或八角云 一書よ水
口兼源寺の僧雲月報日神逆よ逆坂の
因と出るといふる非る人よゆる
暇月もるゆのる 未拍

一書よ此る雲月報日と神書あり
産夜候よ書月報日如燈の神一徳術

後の世に於ては、古くは、柏を尊ぶと云
赤柏も七柏の一種なり又、阿久く柏と
り、一書より、神供よりして、柏を飾る
る、神宮の古例なり、柏を、太神宮、一掃
柏、志、平、古、具、時、より、なる、三角、柏、といふ
必書より、抄りて、其、交、る、者、柏、秋、冬、を、色
柏、を、用、り、る、一、社、の、習、ふ、所、なり、又、連、祓
匠、技、集、より、神、供、八、平、手、より、盛、り、る、人、の、柏、八
枚、は、盛、り、る、なり、又、三、角、柏、といふ、有、天、満、宮
として、柏、を、とり、あ、り、入、浮、い、吉、なり、沈、を
凶、なり、阿、く、柏、と、る、左、の、わ、り、繁、を、り、て、
愚、考、阿、く、柏、と、り、よ、る、我、傳、より、七、柏、小
あ、く、七、柏、の、傳、六、柏、の、傳、合、て、十三、柏
有り、此、より、身、て、不、用、なる、事、ハ、累、す、又

土具、高、く、土、貢、高、なる、事、ハ、二、説、有、二、見、の、東、海、
良、島、より、と、云、云、と、云、云、柏、の、浮、沈、の、事、
内、大、臣、家、良、公、神、地、也、并、此、の、柏、の、事、
志、の、并、同、し、は、と、云、云、阿、く、袖、の、事、
の、注、釈、皆、あ、り、民、柏、の、事、并、を、解、て、白
此、を、を、解、き、り、天、満、宮、太、神、宮、の、解、此
白、よ、る、不、詳、也、
成、美、曰、増、山、并、小、島、月
報、自、小、島、飯、を、用、り、亦、宿、毛、を、赤、柏、といふ
愚、考、膳、あ、り、り、并、よ、魚、肉、の、事、ハ、累、す、
一、書、も、有、り、只、赤、豆、飯、よ、け、魚、の、物、并
と、り、よ、る、よ、必、定、を、り、又、同、書、よ、契、沖、云
り、い、は、と、る、形、を、禁、ん、り、よ、は、赤、豆、飯、と、も
り、い、は、と、る、赤、飯、を、い、は、い、の、り、の、赤
み、を、よ、む、て、赤、飯、とい、ふ、也、云、

ある日月の水を得るやある仙苑
昔の古曰六月土用中ある仙の根を造ら
しめて榎の樹を花穂別よとや
しとて一説よ古用中よと日よりて
榎のをよとすしり

尾形の内もとる事いし海氣の形

五味堂曰海氣の口をさる事いしもの形を
を天細女命其口をさくといふ
愚考尾形の内もとる事いし海氣の形を
を字眼よして一ととる

乃らふとふ事其の考長の考が

愚考の事其の考長記曰決列事其の考
出現ある事伊特謀專通に

即ハ同体

よして月少事とヤ事あり中仙なるの通る
稽よ大なる石の考長立

住はらぬ旅の心や墨火 榎

業叟曰夫才集正二位事経うり事始めの
うり事してありと事やうとす事は事い
き事いし事ありと事火燈よ事ありと事
の五文字ちりと事ある事

門前の小家もありと事ある事

愚考の事其の考長記曰決列事其の考
閑商旅不行后不省方云と日身を安
し事静よ事又百友万事を強て
改て事其の考長記曰決列事其の考
畧事あり又年中事其の考長記曰決列事其の考
一陽事後して陽事初て事ありと事

るまは、刃を動かさずして、
又故婢をすも、
録曰冬至余始祖冬至陽之始也始祖
厥初生民之祖也冬至を至るに於て大切
の日を至るは唐古よりして元日よりきく
禊よといひりされは日本の事なり建ハ小
家も持しめりるは又江家次第
入曰冬至の暮るるを至る帝神龜二
年十月己丑天皇大安殿より出御あり
て冬至の賀辞を受とりし事あり又和皇
冬至を橋の事なり桓武天皇延暦三年
十一月朔日始て形ありし事あり元平年田
祖を免さるしとありはその事ありし事あり
又漢和天皇貞觀二年丁酉十月を小なるを

大いなりし事あり十一月朔日より冬至を撰出
て形ありし事ありとあり彼赤松の台の祠書に
雲月朝旦とありは冬至の事ありし事あり
ありし朝旦の旦の心よりして書ありとありし
矣田北野や浦の事ありし事ありし事ありし
一書あり矣田の事ありし事ありし事ありし
多しありし事ありし事ありし事ありし事ありし
成美曰余昔の海を過に伊弉那郡湖水の
片をきこめて一里ばり入りし事ありし山のみと
ありし事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし
此本戸や溪の事ありし事ありし事ありし事ありし
去る抄より曰冬至の月平野の月並かひは
よりし事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし
柴戸とありし事ありし事ありし事ありし事ありし

の久しよ葉の戸の物に比ば本中なるべし
不秀逸を一言と大切なり故金出板
よおよしよと改一きよなる
護物曰
平家物語よ福原の初より徳大なる大
将実定野田初の日見えむとしてよの多
て想門をまきこころをまよハ内よりの
輝よして遠そや遠せの露亦たらぬ人
の多きよよと昔々遠ハ是を福原より大將
名の日のあつしとすすたふハ想門を論
のさきよとせよとす東のふ門の入り
さきよとすす
愚考秀逸を一言
大切なりとよき言ふよとす
都合せりよや高蟾の詩よ重門深
紫障後月漏 躑躅山宮樹秋の付よす

静 ころを数珠の網代

男の資を什物記よ曰珠数の負一百
八七表百八炊焔一磨轉之別成百八号仏
焔焔焔焔焔也又手黎曼陀羅呪
經曰梵徳よと鉢基莫と云又經略
六穂子後千倍蓮子後万倍水精後
子億倍そつ院子後五量也又大福曰六
根各具六根六く三十六根也是既過去
現在未來 二世合百八炊焔也
勝突よとこころの霞

成美曰勝着よ小すの縁はきくす物
るり又非る名目数衆妙よ云載を八
角の蓮よ縁をそとるり云々
雲ららや穂金の芒の苜残

一書よ小村山家を七月廿七日芒を
りて以後をを遠るきりかよと徳をの
神よりよもの入秋よよおや山田の野
のむらむらむら人那よと山田のよ
よあまつり
あけよよを燦のみ心をくまのあま
さるは信濃のふやのすさよ雪ありて
よよよまをの 野をよのあけ
公石曰
信濃信村山家の信りよまむらむら
のよを遠るそのふ人のをよまのふと
まのむらむらの燦よよと遠るよ
信宿を信濃
の一の宮健信衆方神下の社をよ思
娘よよと信宿よよ在の 神よりよ
るよの 寅年 申年よよと 七年あしこ

関東の人此年よ婚礼を結ぶ寅ハ午
里約して午甲寅のの寅申をよ字のひき
よるよとひとひよと信宿るり種々の奇
奇蹟あまことよ略す
一の 姓よ空也の瘦も空の内
赤子紙よ曰此白師の曰心の味をいひと
むと数日腸を忘るるとりり 支考曰空
也と空姓よ格木を岩の 親也と
空姓よとる中よの系哈たよと空也よ
よ夜の修行をむすよ中よの二字を
よして瘦の一字を互思の格を當り
一書よよと年よと数よよとよよを
あまのよよと姓と空也と純向よよと
物をとるよよと也よと中よよと修

丁 鞋を喰 履くらさるまの字ふおいて
瘦の一字を喰 履くらさるまの字ふおいて
すりよまを喰 履くらさるまの字ふおいて
字を喰 履くらさるまの字ふおいて
は瘦の一字を喰 履くらさるまの字ふおいて
は瘦の一字を喰 履くらさるまの字ふおいて
は瘦の一字を喰 履くらさるまの字ふおいて
は瘦の一字を喰 履くらさるまの字ふおいて
は瘦の一字を喰 履くらさるまの字ふおいて
は瘦の一字を喰 履くらさるまの字ふおいて

空世の身子平貞盛とてりふりの二代を翻
て貞盛法師と号し一始て五処の三昧
湯を中し一巡初一瓢をさるら一若
行せしと有り又蘇釜を製して市朝小
賣らるりありは後の事なりや
夜神樂や鼻息白一 面の内
愚考神祇のまゝとて之を白きと
しへきををこきし白一と切らりもの
住吉社を神功皇后の御代天子
及將軍家より西建立不絶毎年七十
余度の大会あり社於二子百餘十石とありや
弱法師我門は世縁の札
一書ふに戸の所敷るる西と食改より仕切
札といふりのを書て後居縁の御同板る

ふ出母嫁母を令せて以上八母と云
多ふのれぬ花を牡丹の姿り云

公石曰まろるの花を卜よりひくき林多
の花を上よりひくき陽気のち平心
をよりまろる又括別有り牡丹の大漏下
より咲のちりとりまろるまろるまろる
をりりり

智恵のあら人もみきりりりり

愚考名義集ふ曰決定審判謂之智造
心分別謂之愚也そのちりきをりりり
まろる

弁のまろる浅く浅く浅く

一書小曰浅く浅く浅く浅く浅く
し云し 愚考浅囊抄曰於梁縣有小山

山上有水清淺其中生藥竹林和諸
水氣横斜水清淺又楚辭曰石漱兮
浅く花詠兮翻く此依例をえてまろる
一やんり浅く浅く浅く

作の子の力を終ふくまろる

成美曰豊國の神を方度古の境内あり
大園秀吉をまろる覆醬集ふ大山歌
豊國神席壁云零々東山古席郭
蒼苔草上類壻英美花散無
巫祝秋月春風依主張

作の子や島隣小愚太郎

愚考愚を席をまろるくまろるの二月を
まろる月とひくまろる應仁心恭未
任まろるまろるのまろる次席一石と

此く小呼つきしなりと云なり

堀童やんをさきと云をさの月

之紀曰堀をえらふと云とて堀童といふものを
を海童といひたり一は堀の性なるよき童
りのありしてその童申入て童を引よりの
のたらして脚と云の童のありと云也
愚考拾遺集よふ夏の夜を浦島の子
の衆る事也やとこの男くはつてくや一なり
らむ又監令婦とて好くはつてくや一なり
たまの夜のえとてぬきとてはくつなり
なり

君り代や荒十 系も 端ひとら

太節曰近江玉坂田歌 能くの社よは月
新よ神事あり昔年を此系の日女

をさくし男の敷ふと端を改ふいしてき
被てわたりたりと云なり 拾遺集此歌よ
近江のり能くのありとてをさくしは
るきし人の端の端と云

藤中いふと云ふと云ふ 類聚

藤中紙よ曰藤巻 撰の時去来り許一
云おくらあしとてお後の為なり一集よ
ありと云ふものとして書たなりと云なり
愚考源氏帝本の巻よ君の用心を
と云ふなりと云ふものとして書たなりと云
りよよみたりと云類聚をそのきと云つては
一と云く心不そと云ハサハみぬ又総角
の巻よと云し後をらと云は歌よ歌
を引つけたりと云なりと云なり

まゝ思ふ異苑よ曰屈あるはふその
峠の尻らまのりとのありとゆ七紀よ曰以
蘇美子聚指紫西標以象陰陽相包
累未多散也

交子や兵とすの美の 詠

一書よふる鼓るを幾の麓の峰添るあり
介を羊畑よりあり斤用龜井勢を尾等
我死の物も小松を結て昔をのり守
遠出よこのいやり下の地への障

法住管云このいやりを蚕畑よふ美ありと
此よそのうち香火を麻火を故火を
よありはは畑を供するものありはは畑を
ありといひしをありはは畑をありといひし
ありといひしをありはは畑をありといひし

愚考清浦真美抄本を説く

抄よまうにけりときを新八年増よ蚕畑
よ蚕といひは眼の周梨の袂よよりのと書
ふも大ききるの非るの六百番歌合の時
歌眼法師よみ出た連とも新名目より
て依例するもゆよその歌止め歌をの
自よ并出たことよそよりしてういやり下
もこのころるるるるるるるるるるるる
眼の障よ云ういやりといひよふさかしの美
有りる中よいなりし蚕畑よ蚕を
このいやりよその下のよ蚕畑よ蚕を
よありはは畑をありはは畑をありはは畑を
よこのいやりよ判者後成郷の云先このい
やの下の歌よ万をよいなりし蚕畑よ蚕を
有とをすよそよりし蚕畑よ蚕を

此境にふらふらわらわらとくらしき
もくらのりもや

くしんくしん角つらつらわけよす方ゆえ
赤子子みくらひわつらつらゆき書之 原氏源之
巻のうらををを并らりものなり 蔓延し書
句會曰連續之見也と云く 一書小莊子
曰有所謂蝸者君知之乎有國於蝸
之左角者曰觸氏有國於蝸之右角者
曰蠻氏時相与爭地而戰伏尸數萬
逐北旬有立而後反

五月るふ家より控してあめくしん
師尹曰説文曰附螺脊負殼者曰蝸
牛無殼曰蛞蝓 本草もる陵螺と書
る則爾雅もるつらつらと書
一る士の潤次もるる五月も

弁地曰念一るふるををのりし
一る此一字もる台と書く
らハ能潜るるもる

五月のめりる
愚考 実方申將の事 流るる冬の日小出
より 寂わらるる無別 掣つてはやの字
を疑ひるる 笠高やいほこととを
五月のめりるると二切もよみ系つきる
るり夫木集ふ五月るる系野のる
ふあみちしていほこと三河の沃のハッ橋
るるの意味もる 似取り
はくつらもるてり 坂や五月る
はくつらもる綴つらりの延後るるハ 料ハ

この次右子の爵を冠し後一節のこゝの後
の因幡よまのりし越えしきりこゝろ不代
のよまふ心をさるるまのりし一節の心の不と
ちひやるべし

宗師や秀よりのさきれたけりの花
愚考百合を地をよろのこゝろよまのりし
さきハハの花よろのこゝろ

子やまのむその子の母を母の嘆む
成美曰万葉よ山上曉良おくら等分
あまのこゝろむ子あまのむその母を我を
はらむの歌よあまのこ

ふしつ夜をさぬ冠者よ久し
愚考二條院の成金賣吉次末春とりよ
りのたの鼻列より京路一毎奉よりの

下園や地味なりのの際のおま

愚考海衛日地蠶化肢暗折脊出而る
蟬よりのまのまを下園をまハ濕気ありて
出ずしりのまを

舟引の妻の唱歌の合歌の花
一書よ舟引唄よ花よあまのこゝろ
あまのこゝろ夜すしりぬてせとま

日の曇やまのりし牛の舌
漁村云山城國宇治郡京と大津の二里堀
の西の筋あり

愚考おこの敷つく地を曇りし
愚考竹を六十年よりして花咲くまを

そ竹則枯りし有りけるをそまよふあら
て高き三日月人を恨りて叢生する非有り
誰んをまよふ如く石原畑畔るくふぬら小竹
有り決りて大竹の十年枯りてそまよふ
夕々事や岬並のしるくもの暮
愚考り岬を秀山之雲の暮の言く低く
まよひまよふを元山の歌よまよふしるく

終夜林風くまよふや 裏れや
一書ふ如聖の全昌寺を大層なるの城外に
有輝ちる有り芳良を夜公稱ふ別ま
てはまよふ家しるくもの吟て聖日暮のまよ
寺ふ止家ありしるくもの

又月や、六月も岩の夜まよふ似り
愚考り埃囊抄曰請文書を依りて夜庭ふ

晒すゆふ月とりて古今俳諧歌六首の
夜の歌よていれしるく心をもよほす
しるくをて阿るの川原をまよふやわらわす
胆を母をまよふをてまよふの吟る有り近路の白粉
日のまよふよりまよふしるくの川をまよふ
まよふしるくをてまよふの吟る有り近路の白粉
つり籠

合歌の本の善哉もいし星の歌
一書ふ曰新後拾遺集ふ云七夕の夜も
うらみまよふしるく一夜のうらみまよふ
らむ合歌を阿るまよふまよふの吟る有り
あみや眠るまよふまよふの吟る有り
のまよふまよふの吟る有り
まよふまよふの吟る有り

鶯秋曰後道交窓伏合欵爰又木いってその
愚考 梧物記

日合欵一名 夜合和心志 合人欵 示爰
よおいてその葉あましといふとあり

愚考 源氏夕歌の巻よ 咲花ようつら
てふまゝははめとをてて 過らきき

の節くか 家よをておと、子をけけは
おまハ 槿花 一日業と 阿達ハ その一日を

おけ 新不よをて又本さるる
をらしてありのるゆ 我の志事よの

愚考 愚補 人の親の心をや 并ふゆ
よも子をぬぬふたふたよあひぬら

果もるや 芒原よりのりて 東西を
うーるよわとるその心よよ 瓜子の親の

心よをてとてり
君の心をまらるる下 花すま

愚考 日又味を 世と 目見とのる
智七も 去来う才 芒すて 送る 夢うその

有りま 源氏よ 魔花のめり
出とよををて 出てやうぬくと

新撰万葉よ 秋日遊人 遠方道
遙 莖外 見 芦 芒 白 花 猶 動 似 招 袖

疑 是 鄙 生 任 氏 芳 又 古 今 集 小 枝 の
形 の 子 の 枝 の 花 す ま 夢 小 生 て 万

袖 袖 と 見 申 心
い け ぐ ぶ り 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢 夢

太初白山家集ふいに氏くみおのぬくつりして
てふつりまき伏むとけりふうがしきる其の處
相のあふうら尾くそるる燦の内

一書ふそ名あふ後成郷自撰神々々々
聖多々の松風身ありみりてうはらぬくさり
係その置はあふふの裁入と

病序の夜夢よ落て猿啼ふ
愚考白氏長夢又集目困病とま憐病
鶴精神不換翅翎傷毛病丁の佐例と

心さんやまの甲の下のまきりしす
一書ふそ多田の神社ま八段まご加列
小松岩より一町斗南の道の傍ふあり

実盛まそ抜別當と号し生國裁本
丸墨より十町まらり北長以村の巻く
此幾初么ふ屬し後ふ平宗盛ふ其ふ

ての條系よけて戦死す又実盛の撰ふ
何ふむとんやそ新抜別當よけてけりる
二日月ふ煮のあふまをうらり

公名曰食物本草ふ曰鰯のあふの鱧のふ
日本よりま有やまらひ煮魚のあふを本
よあり魚ありとまき都てあふの魚あ

目んてんてま目をとらめこのすあふの目ふ
あふまて海産よあり日没しして今を
よしと深かり何三日月の照をえんて

たとあふらまきてあふまらうらり
加後よ諸志をよるふこのふら
うらこのあふ人のあふまらるの社

の神燈ふとらつりてあふしや

月影や拍子ありあけ 膝の上

後物曰撰集抄云曰そののふつづのま
はりちの連なりありといふ世ととののま
後ち如後の社ふまありをを年一きくを
つとて心國のうとく修りしちりあ又路り
まあつめりるやと仁安三年十月十日の夜
すおりの帯とまあつすとて柳屋の社の
しつとて静入法籠ををりちりふと木の
まの月おのしとあよりち社とてあま
あまえとまあつとてつとる忘てふありあ
つりりあといはりいとありしちの連なり
愚考柳屋の社と加茂の社ありり日本
紀云曰持統天皇四年正月皇后即位し
あふ公卿百官列位連連り洋奉り拍手と云

周礼九辨の注云曰拍手両手相打く
新不うししたふと見え送る月夜
愚考六條ふりありいといくをあて
髪利為すふちありてつ王のま
はつと判刀をてあてあふ斗こあひの言
る判出ふはつき警るりといとともえ
あふあふは判刀をいさくといり
るりあひあり

月法一抄のちりる抄れ上
一書に抄れ宗る本時宗と云一遍上
ノを祖とす無也抄親の告え依
て法國を抄りし決定往生六十万人
の札を流人ふち本寺を相列こ
岩澤山法濟光寺といり巡國のら

月法一抄のちりる抄れ上
一書に抄れ宗る本時宗と云一遍上
ノを祖とす無也抄親の告え依
て法國を抄りし決定往生六十万人
の札を流人ふち本寺を相列こ
岩澤山法濟光寺といり巡國のら

を住蔵と云ふ山上人を隠居する
二世上人他阿まより代に他の上人
号す一世上人気比の明神よ泥滓を
あふりて社政小砂をまゐるひさ
代この例とす系譜の案を門の弁を
木履をとるきさう一持行の持多の
石をとりてる相きさうとす氣比又八箇
仲衰を皇行宮の通よりて則帝の
美をとるある尚國の一宮あり舊事紀よ曰
二月幸角鹿則興行宮而右之是謂
筭版宮

このうゑの夜の月もえさるり世道送

一書よ祖徠曰於子を甥のるる信正る
とるるる人の公卿の子をいふるを云

を養ふよ叶よやうるるるるるる
愚考礼檀弓よ足牙の子を於子と云ふや

あやまのてきさうあやゆり鱸

成美曰和漢三才名云曰鱸^カ鱸^カ魚形色似
鱸而口潤其尾有小岐有聲如蛙鳴人
捕之哀声如曰五紀云又似曰岐之雀氏
食經鱸音客和名曰知加布里以鱸
而有黑点也 公石曰きさうを俗よ蜂
と云ふ歌云サソリ我信濃よてきさうと
ゆふ此魚鱸よ似て針ありさうは至て痛
はより鱸をとるとしてあやまのりてふ
きさうをまゐるるるるるるるるる
りみるるるるる一つの附るるるるる
中積る股洪水の後更ふきさうるる

その後徳のせむる事ありて一とあり又
寛政の末よりきこふ事ありて一とあり
僧正の妹の小室れきこふ事あり
一書いふに彼花山僧正のうけつて一とあり
のとも并ておとりの事ありて一とあり
きこふ事あり

一戸や夜もやまらぬ 弱 途

愚考一戸を南朝飲して盛恩より十五里
たして下りて牧を花牧屋 設 荒野 等
その中書物後より子らのくめ弱途二十三日
とりぬ九二百里の行程をまは夜もやまらぬ
とあり

田舎間の存紙さうし 業の宗

愚考田舎間を六尺八寸厚の厚を一寸
六尺京間を六尺三寸厚を一寸七寸三
寸編方六尺六寸厚を一寸八寸を寸高
野間とありて古昔より用ふたとあり
禁中七尺厚を二寸各横を四寸の半あり

此ののれもさうし 旅のゆき

成美曰古今集きのゆきまて早苗とあり一
いほのゆきも楢葉をよきて杖のゆき

非田系

花すきき大名をたのむ

愚考花は是の秋のるすの結遠集ふおはる
よしてやする人もさうし人の子も古き
やうのゆきもいづる道いづるのゆきも
ひるゆきとありて田舎の初るゆき
成美曰非田系 命はつ

人皇四十五代 聖武天皇 天平二年庚
午鎮坐延文年間有故合系平将門
美云 愚考北系五代記曰能系といふ
るは神田の神と限ると有り由院宣と云
我朝よ秋の始るる多々地神五代天照神
の天の岩戸よ入るいし時八百系神集り
て胡舎りし神楽秋を奏し多々いし
以來こそよよしく能武之靈といひしは
足箱大支多々天照太神十歳曆を春日の
神三歳申雅久々住吉の神よしてや
あり是皆神代の事あるなり又院宣小
我氏子といひしは祈禱をせしめし
能の舞樂よと志らんと有りしは毎年三月
十五日神事能の所と云く能の舞は上松家と

小舟家の合戦よよして大永四年神事能
おろして今よそのめし系八幡よ暮松し
りし舞楽能の考あり此人に戸よ下
りして居住し一年一度の神事能
を能の舞よ今よおろして能の舞
さして台のまを能候方より系礼の舞
固を仕りし行列を花芒といひしは
まゆり林の文や能の舞
成美曰病源海曰風瘰癧一名癰癰人皮
膚虚る風寒所折則起也和名加佐保
路云
塩魚の歯よとさしや林の考
一書よとさしや林の考

独存もよき寝とらむはつ子日
愚考民家宜忌録よ曰正月を独床と
いむ月有りひとりの舞進ハ必不祥を招く
もの有りといふく止る事なほ進ハ伏籠と
床よ進てありする有り進ハそのう一
神子目とある進ハよき寝とらむと思つ
るも又五雜俎よ曰止月上ノ子甲子
るまハを年丙子るまハ早戊子るまハ
蝗虫庚子るまハ叛壬子るまハ水く
時をくき一未ぬ夜とらむ進ハ種
愚考空也の進身神鼓を夜中五羽の
三味場を夜行す未ぬ夜をまゑ氣よ
るまハおふろる有り

うらやよたの切替猫の意

去来抄曰翁の曰心よ俗情ありもの
く口よ出れといふる有り一進進ハ終
是よありて本情をあらはせり是より
然人々急は方よ考く人のもてはやす
多し急進ともまふいりて一めて
本情をあらはす有り 愚評猿蓑ハ
祖翁の精撰ありて急の七部の内
一のつゝも花実全うして序よ一自
筆よ書多し吟味をそつ多し
集る有りあり悪評の白を入る
一き謂る一去来抄の梅いり
有一踏よけ白本紙を定家卿の
引らやあり一世をまゑのり猫の
あふいり春の夕は進祖翁筆人

を染りありて則 宣家郷をよせり
うらみありありいや宣家郷のるきふ
ありと陳するれ是則 摸写交態の
台法ありて始と終と態をよき
くありありて意味ありての状あり
ふんふ人去来おの著言ふありあり
るの連 翁曰もあてよるあり
る情の本体をよき見ぬいて
用捨あり後令い他ありて
用心してかぬよ 程するよ
ありあり

いとゆふのいとあそふと虚本
愚考の虚本を枯木よきあり
芽の出るる前ありてあり

のけりやや紫胡の糸のうす

一書よ云一本よ紫胡の糸と書し
非るり紫胡を糸のいとあり

糸拵よ糸」のよを拵る

愚考本草曰得風不揺无風自動故

一名曰獨揺 物糸ゆふのよ日を也

るを連はうこく一」こく」げふ必伸も

白く美有り花よ大毒ありんね

城のあて一夜集あり葱のき

古連曰ぎがを葱の花有り人丸の

をるあり一み一夜集ありの裁入

萱子小端洗ひ」げや

愚考萱を皆亡祿よのみよ

萱草の物やらよ曰哉人一人の子を失ひ
て悲しむ理む一夜の思ひ違ひそのあよまの
草せりりとしりやと道にハはらるるあこころ
の弁との弁人空の当胸よりあを道にを塚の
すきまに字義の此處業道傳の句も墓
よむすひもよ此句を考評して
陽のとすむの後對といつらる思説を
祖籍を空傳よ又盲よ歳守の罪又流
くはぬ堀川百首よ昔もく一味う垣根
るあまよそのはらるるまよ一つらの萱の弁
して右尚胸の句よ二三の字のあらる
る古池集水鏡の編注よ出守

愚考 萱の目よ木氏の解ありアサニ

一とホ子ワキ草ととりよ縁すりあつて
此は 勅書を 徒よすすまはるる

萱の筆落しつら 快の那

愚考 萱の筆よより弁あらる時萱花を
よしを義えしめて 槎のあつて
そ見えしめしめし 萱花を例
のす法ららひとて 槎を
よきせめしめし
一花ハをらぬまわら 山を
愚考 我の念を花ぬす人とあつて
あ一花をわけて 物あつて
を花よ笑ふまわら 又を
人とわらむとわらむとわらむ
を新よはらむてきよハ花の考

愚考、神を義楚六帖より明相出得
得食粥、午前得、神、午後不得食、傍
祇律曰、非時者、午之後、食之、違、神、
之、四、八、分、なり

類考より、花より神の歌

一書、曰、大君岩檜のよりのちきり、
そと、一、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
神、此、神、よ、あり、の、一、云、主、の、神、を、美、目、
なり、く、その、く、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、
ハ、の、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
て、岩、檜、を、後、小、角、の、彼、神、よ、檜、造、ら、を、
一、故、事、なり

一里、を、傍、花、の、の、子、孫、の、也

書、曰、上、東、門、院、を、良、の、八、を、檜、を、執、り、
つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
いる、み、や、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、
と、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、
花、の、の、花、と、改、て、檜、の、料、よ、附、せ、ら、
ま、し、と、なり、世、終、り、の、法、よ、曰、益、し、
一、度、片、く、八、を、檜、を、お、り、て、ま、あ、ら、ら、ら、ら、
案、武、部、元、次、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、
て、則、取、決、ま、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、
花、の、の、神、よ、は、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、
の、八、を、と、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、
そ、よ、の、わ、ら、ら、ら、ら、

花の傍の神の歌

公石曰言の存ふるりしるは概亦の
家一一生食を摺墨ふたふましくるを
有りしひ阿波國勝浦に免して石と成
しし此るる義仲をくくせうておめし
とらるる一しとらしつらるる白意
一義仲公元暦元年正月廿一日粟津
より石田為久を討

新書をあふみの人とをみたり

先注云曰尚白の類よ道にを丹波に
初書より年よりありしつらるる
かちいりけり傳りや去来曰尚白の類
何しつらるる水臘腫として書然を
ゆふ使ありし先師曰古くは阿波國の
書をあふすつらるる阿波しつらるる

愚考尚白も守りの遠人さやうなる
異言をいりし月のあもあつらるる
考言を傳りうけひりむや書ふたり
と多弁新書より夫木集よ朱路も
今一強かんをむるういほく一より書
ありし心此不う書り初よ皆書方を
とらるるよめらるる古今よ守り
林入るる肥後の限本能書士の屋の
を是れ住うまき皆書を方角よあ
小見もあまのりるるを是書是書
説と謂つる書一書よ澹齋云
そののり先達の説を奉らるる
すわたりあつらるる連款より上よ
り抱字あつらるる必しも書り

いづて道に入りまじりて

吸物にて先出を好まじきものすむ

一書よ小肥後丞水善寺より水泉池清あり
言出ふるなり

はるまじも廬曰く男を有るものよ

一書よ小唐の詩人より茶紙を書

人より廬全の名をいりりよのよて茶人の
隠考とす

備をりり車ひきおむ

古住よ曰く夕秋の家の侍あり 成美曰

源氏夕秋の巻よよきをてを

侍りていとよむむるわさるるや

あやめええわくつき人侍りて

いづる道とらうこやき大徳よあり

おとあてとてとていづるなりや

て好りあり

柴のやや高まぬす方よて

風谷曰古今著聞集よ云徳重信が

のよるありるの家よ畠よはを

侍りて或夜盗人の侍引て

と出てよめり能ぬ守人を

出せよらむをよとて

よるらよの以大盗人よ侍

りよりのありるゆらよ

るむ

よらよの雲のよる

一書よ踏鞠のやありを

をよまきと虚よ侍りるなりと

愚考のさやうなるむねたりしきりるりよて
るり多々良山の所々のあききんを猿鹿ふ
してまゝなる白るりあきことりふ字ふ目
をせし一攻の白るりその猿鹿の場を
定めて執修るといふなり

石心のあきりるる花のほそむ

一書ふか後た集門重氏森心してまぢ萱
石心とり入酒喜のおりる盃の中一は不みの
花のあきるるをえして血光を焼くしを付く

魚の骨志をうまうの志をえして

結人入り 正門の 後

立ちの尻尾をえふ寸母ふと

陽あき竹の雲子と

古住小曰結人のいふはるるのえの價

るりといふ 又古住入曰浪化云今の解

借ふお徳等を月りるりいり 去来日記

るりくち一卷ふ一二句あきるり猿

木の中ふ待人入り小正門の猿も門を

の義るりは集撰ふ何ものりり木の

るりふりとして 糍結ふの白を供して

入りり云く 成美曰深氏末摘前の巻

一程の所はりりあはれぬあき山ハ摺る

のいといふしきりりいりきりる

愚考古住先住とも結人入り小正

門の程は一白ふあきく解字を所白

の法ふあきりあきりりの價はるりふ已

ふりて結るるのえふ云あいなむらむ人

まらふと見えふ車いはくまき門を

古往小日西行々能因々野の人の侍と
けりえり 一書より時子房の主を徒小僧
茶をばらうまは美女の月をすまう一茶を
とむまはく人の末のをまいとく中路解因
西行の徒をくむ一茶を自の侍西行よ心
引うく被法師一筆あつるの方小い
そりりたるれうく部くく撰集有と出
思よ子細もあまは令まうまうき
ありのりくと旅徒をくして途中やうて
出られくその徒も白中よまきりてき
こえ侍の推考の侍をりまく 愚考
成不と撰集の侍をあまりよ比無小
あそく見ゆきとく西行々能因々とい
ぬり 去来々自今の侍をりを野の人

の侍と書えいといふ鴨立沢の秋ふ
舟て音書よりの旅集の思ひまあり
まきりるるるく因くくまありく小書の
うよあくくまきりる方々の一くや西行上人
言費山よむむとく一書後成郷千載集を
えくくあまいと書て年あまよ弁意あり
歌とも書あはれめてあまるとく花をくぬ
まの紫あまの連と舟のほくくわらもやあ
と君ひらとくあま後成郷法師のあま連
あまを感くしてより ありあまおま
入まひてそのあまよ世をすくく入り
るのまの紫あまの連とくあまきりる
あまあまの紫あまの連とく三年あま
あま撰集の二字を撰集あまあ

一 不ゆりのも 係り建ハ是未此情小近
くささ建ハ能因のさういさいよしお不つ
の般

ふ代終つて子日のをさるし子日

一 書小十の益を平生の潤澤よるを知ら
ひとて見て子日の松をハ附く

西行家集ふ代終つて子日のをさるるく
はめつてや君のよるくハの教小くく

愚考文徳實録曰天安三年二月禁中
有曲盡預之者不遇公卿近侍數十人

昔者上之申必有此事時謂之子曰然
也松といふはして二百よりいさくあり

定まらんき後より

金辨と人ふ呼ぶ身の安さ

一 書小月造の町人の益ふくさるき派利
りして錯雑依りの腰の物をきくらめりす

その情をさるる如し坐るより名を金辨
しと名をさるるあり

傳玉の考より口い今や城をよと使へんし
らさるる之山意小入の情よて金辨と吳

名を法り

何をさるるは法ゆをりりあり
是とちる身を西云うさるるも是

一 書小西念を法然上人の弟子に羅方
刑をらる

一 書小例の親妻の体之世中ハ
何をえても只はゆをりりあり

露のやうなうなるなるきつめのよとりの心
ふれて、西急と稱してらるる次める末の
歎きもやえくらの修あり 愚考はゆも
うらとりのふそを親しむてある花の
親志有り西行上人を尊称院上北面入
武の達人俗名 湛といひ山母路をまき
卒考を修り保延三年八月家出して北山
西急のりとして判髪河下卒二十と云
西急寺を 行基の開基今も専念の修志
是を修り 西急寺ふまきし時とめころし梅
さうりあり春窓ふしとまきも人を折りふまを
よき茶臼はゆはうりとあるを八月よれ
八月ふ白雲の若阿り花とある 卒二十
三西急らありとも修りてとある西急の衣俵

をうらむるのそきききハ西行 ちるるる眼
あり末の歎きふまきもは修りてとある
西急の寂をさすり貝系末の路の記ふ
曰大井大久年のる西急の墓阿り西行
坂といふ歎きを一首のた合とよて末
考をいむとめめ 梅 極あり西急を
法然上人の弟子ありて何を附句の
ちとひとちする西急の名も世よふい
ら布とも阿るものをこのくたもよし
住者の心いり見末 あり西急の名書
藉ふ阿るを修りて七八く阿る
歎きのりり成美曰下学集飲食門
共壘スイクキ歎きもまき菜ふ汲研をく
まへて二十日とぬる寸納足のきとく

白み引てぬこり出っを飯の上ふそそ
喰ふ木多福島の松く山嶽山のまきよそ
すろりなりり方俗スンキと唱ふすいそ
を女節流中の珍砂石集も出さす

何坊のし 子 狼 の 舩 く

夕月夜露の萱根の取廊すり

人お志事し一春そよの 水

愚多思ひ暮る八雲住抄不露子を
ゆふ道歌匠集より唐古よそ二人の
女を埋し暮よりせしる子をゆふ又
暖涼ぬる糸の忘きそよとよふし
をぬるくし又つむむるをぬる

糸極服一もいよ笑ふ 夕

ままを三月何け不れ、

古往不花を極ふ何く又極ふを
ゆ何の極をゆて花とするを猿蓑
よ一白ゆりし多し初心の糸あはりぬ
なるととと 一書不此自の花を
名人の書あよりそ今時只志感
のあてを記をゆせこの又奉自の曙て花
ふ城のと終ハしいるをゆて存りなり
きやしこるる何の先師秘流の
愚考鬼也獨云ふ日花を極花といふ
てまき 白花ふなるを 吳木ハハ
不及たは極ら何をきして花とま
たりやと海く花水入るるふふと
近年も極をゆて花すするる不
やふふはゆて花すするる不

半花仙の花をさへ撮ふすらの歌云詠
門の癖するこ又花を撮ふ一志不き一族を
希代の花より多罪のふけりなり一志
花仙の花二つちのうら花をすらの歌既
不咲花を百款ふ一ヶ所なり又花を表
ふ引上るふ子細き一の表三の表各の
表よするの歌を後手決身なり初表ふ
花をすらの歌一余美なくを先三すて
あふ一白白めより下へ出すを古今ふ
例なき撮るはやをさしを近年九白め
七白めなくふ花をすらの歌ゆら古今来
る有旨の詠外く又花仙ふ花三本出せ
しころを二花よりとさる故なり一
二花三月を定法ふ事ごとく花の香あり
花ふ成るふ小心の詠ゆらや花三
本見ゆらするし有しを不覚悟の金
るふ月花を一巻の的詠ふ花をすて
大切のものゆらふ名残の花ふ香を
をすらの歌をすらの歌思慕
をさし一と者ふ一竹ふ日花の香を
よて連歌をば花御詠をまの歌と詠依
す一花は大切のふらるる一字詠歌
の意ありと梅の歌をて花ハす連ととも
花の歌一梅をさすめ古今の法令と更玉
刺祖翁の金玄のさすしく自己ふ依
詠を知らぬらと詠ふものや同く紫あり
る則梅をのふらる一有り
梅の言葉ありこの花のとあけ計

一書に小比のるを所謂之故切る有り梅小の
葉の色をまよして東海を以て故一口小
云のよしと云の感嘆少有り云云

と云ふ事と結ぶて下さす事と云ふ事

成美曰三才易云曰今云稷圃子之類
古者祭多用黍稷今則以糯糗食又和名
抄染之度岐祭儀と又宇治拾遺云云
と云ふ事とせと云ふ事と一と云ふ事とらせられハ
愚考神名目於聚抄曰糯米を蒸し
て鵝卵の如くおしせして斤木よ盛て神系
ふ傳へ

稻の葉延のらりるの事と云

愚考新のなと其の白とる九白の
白葉のいといて交ま有り

穀心のほりぬと云の類は 陸奥山
内義政と云と云の事

古往皆曰西形の傳と云去來文よ曰
此の事よ西形のを抄りぬよせと云ふ
てよ又西形の陸奥山を類の時陸奥山
うき世をよと云ふうり抄ていふ有り
ゆく事有り云と云 愚考此又傳更
よ心ぬりいしと云の事と云て我々の
ぬく事有りといふ事と云と云と云の
務授と云と云と云と云と云と云と云
傳有り又世上の説よる内義政と云
盧名有り只し傳有り傳と云と云と云
ハ云と云と云と云と云と云と云と云
ハ云と云と云と云と云と云と云と云

るしん内蔵政のまをうきしん内蔵政のま
手澤のまをうきしん内蔵政のま
らゆきしん内蔵政のまをうきしん内蔵政のま
の法をたれしん内蔵政のまをうきしん内蔵政のま
てのえしん内蔵政のまをうきしん内蔵政のま
うけしん内蔵政のまをうきしん内蔵政のま
善政のまをうきしん内蔵政のまをうきしん内蔵政のま
棉のまをうきしん内蔵政のまをうきしん内蔵政のま
ありしん内蔵政のまをうきしん内蔵政のま
しん内蔵政のまをうきしん内蔵政のま
後又しん内蔵政のまをうきしん内蔵政のま
不破の国しん内蔵政のまをうきしん内蔵政のま
二夜うきしん内蔵政のまをうきしん内蔵政のま
善政のまをうきしん内蔵政のまをうきしん内蔵政のま

次の佐者もあつた身のうちを附りて
て向るなりしん内蔵政のまをうきしん内蔵政のま
よ附りしん内蔵政のまをうきしん内蔵政のま
曰任加茂系系主に於て永持内蔵政のまをうきしん内蔵政のま
武天皇は系系主を是のまをうきしん内蔵政のま
系系主のまをうきしん内蔵政のまをうきしん内蔵政のま
ありしん内蔵政のまをうきしん内蔵政のま
あるゆゑに系系主のまをうきしん内蔵政のまをうきしん内蔵政のま
うきしん内蔵政のまをうきしん内蔵政のまをうきしん内蔵政のま
うきしん内蔵政のまをうきしん内蔵政のまをうきしん内蔵政のま
してありしん内蔵政のまをうきしん内蔵政のまをうきしん内蔵政のま
はしてありしん内蔵政のまをうきしん内蔵政のまをうきしん内蔵政のま
一一人のまをうきしん内蔵政のまをうきしん内蔵政のま
やうしん内蔵政のまをうきしん内蔵政のまをうきしん内蔵政のま

えをさうめてさる野へ細めあふとさく
ものうらみのをりてまの目よまき野
橋をさうげのるを思へ合せつを
ほよよふちりる魚くふるむ

成美曰くまの百舌め 一あゑ

成美曰くま木集曰くすまのまのりあそ
すうし小倉うり山の志げあそりさう

伊室よめぬ 水の海は

愚考り流義云海遊志とを内海と云
又瀬戸内とけりまきより九列格一け
て水海とけり入と云く内海の浪の備
干宮りありと相漢三才集云よる水
水海を水海の海流なり

わくまきとくし一あゑ 終め

大膽よおのりてはまぬ意をて

公石曰く伊勢物語曰く陸奥の女をさう
ひ一夜らりてまきと夜涼よまきあつて
女歌 夜をあそびてまきはよふらめあつて
りげのまきとまきとまきとまきとまきと
小刀の拾みあり 細工とら

成美曰く人そ歌合よの浪やうけりもあ

つとんまの小刀のあよ一まきとら

さうらむ

そくと海よあそびとあくめむを歌
一浪曰くあむとまきとまきと律義るるを
愚考り小工面の心る一工地悔りくらむ
らぬり等皆まきの字のありあ

幻住菴記芭蕉州

一書小祖菴幻住菴の文多三通あり始
の一通を後柳舎小舟中の一通を賦之流の
一通を猿蓑集よ出

石山の奥岩岡のうしとあるふ山
あり國分山とりみそのふみふか
ちの名を傳ふある一

愚考江別栗太郎渡田より石山を尋
ねふれ終る一里計幻住庵を尋ねて
之長持寺の境内より出守ふ手より八
え正天皇養老五年勅命よして
函よ建らる終基を造り丈六親迹
の像を造る云々

麓小細き流をわたりて

翠微小堂ふり三曲二百歩

ありて八幡をまじせり

一書小翠微を山の半腹なり 成美曰

杜牧詩を寄勢壘上翠微 爾雅曰山

未及頂上在旁坡陀之趣名翠微か

しこ小八幡の小社あり傳ふ椎の末

あり昔のよやとゆい 一書ふ山の

形の美ありも翠微とりし

非体を弥陀の尊像とすや

唯一の象より甚忌たりるを

兩部光を和らげ利益の

塵を因しう忘るるを

愚考弥陀を傳燈録曰性情尸如父之

各月上母之各殊勝妙教云々、西部六地
弥陀垂跡應神玉皇也和共光同共
塵界して和光同塵といふ

目次多々人の指さつりて是れハいふ、
神と云ひの志のりるの傍小住
すて〜子の産ありよのき根毎
新とて〜の并ぬねりり警
て瓶狸ぬ〜とをぬりり知住
房と云ひの傍あり〜を
勇士及泥氏曲水子の伯父小
る心ゆり〜を今を八年計
むり〜ありて西よ知住老人
の名をの并のこせらわ
一書よ及泥氏曲翠通称外記 一書小知住

老人を膳所薩中 本多八帝在膳門六
十余歳より卒寸探山居士

中又市中をさるる十年計
ありて五十年やちうきく身も

成美曰時又祖孫曰十七文拙歌二年
義典の并のを考ひ堀牛の家
をもちききて

秋亭曰古歌二首みの虫のみのや失々む
百の夜を父よおよと吟あり〜ぬる家を
すてぬ心をあり〜堀牛 立より〜くもた
らぬ世をきと

奥羽象馬の異き日小面を
あり〜すするこちゆみら〜
き也徳の荒磯よきいすを

申す方にて

五味坐日能周法所 志るやうに波の
うねしはたつていふまで 阿仲并らうしき
六しの言漢 一説は 異相象浮の異
き日とまはたつていふ 松島象浮とるけ
まはるゝぬを 孝老のあややあらうと
と云く 愚考松島を五月の初まで
象浮を六月の末まで何そ松島象浮
の異き日とたけけるもいふや 異相出
相象浮北海と一説し ぶききみくら
りのるり又異相ききくこと 後述の
拍子ふらうりて又孝老のきき感す一
細名と歌きりていふと一 異相

松島象浮とる 龍柳の毎帳ふ等
是より幻住庵の始末を述る
今歳湖氷のる并ふとよ
雪の深草の流連としかの
芦のいづ本の陰ぬのり
軒窓 茨きあつて 垣根結露
とて外月のほいとい
くろそあふ入し 山のやうて
しとさういふのる并ぬ
一書ふま本集 ころとさうやあふのうり
のいりてさういふ
らむ又山家集よりいふ
とみりふ身を花らりる
らむ 愚考松島象浮の

を流すやぬの草をてて中平のきこを
て集く入る人のと云くせりてを史及集と
りて蘇の文とていひ皆流りてるよ小はく
まのりまて知りぬへ

そり小春の冬幾よをうりて
はくし一咲のころり山家松よくけて
時を忘るしきり秘宿りしを
のゆりまてあつを木片きのはく

一書小支考文操西折の歌ゆり全久を史す
ゆ信久選小宿りしをるを燕るりと

愚考平為春終片の歌ゆり小製りの歌
小製りしを精小中りてや折みらの
宿りしをとりてとらるを史す

可しき小宿りの字を宿りてを計るり
しや又曰本流きまを守屋の史の考と
るりて太子の流りり多入寺を流りて
あゆしよ寺流りきとり入とりあつる

魏吳楚東南よをり

一書小杜子美岳陽樓小登りて昔圃
洞庭水今上岳陽樓吳楚東南増
乾坤日夜流

守り浦湘洞庭よをり

威美曰山谷詩小惠宗烟雨掃屋坐
我請湘洞庭欲喚篇舟飯去故人為
是丹青 愚考惠字り草屋の各画不
見とるりて舟を呼ひて是ハ朋友の云る六
画るりとりよよ警りてはるり湖氷東

南ふ流をよるふ心を能くしおのそん
身をよめるまのしを眺守方より引くけ
らまのてのりつあ

山を未申ををららら人象
よのきかたふ満より南葉峰

よりのおち

一書ふ家倍ふ曰南風之薰行可解吾
民々温行 愚考熏風復のゆるるのと
夏文続集のえげ又呂氏春秋曰東南
のゆるるなり

山は海を浸して涼し日殺の
山比良の言根よの唐縁の松
をうすみあめて城あり橋有
泊よりみみある意えふのよふ

本樵のふん

一書ふ山中を幸樵唱有叶雪の情こ
思考或りのふ曰本樵の序を本樵の唄
をりふとさきまハ此あうまのりふを

あふ樵交の唄ありと知つた
替りの小回ふ早苗とる秋
苑のふ文園のやふ水鏡の
まろく考美系物とて
ふふひといふ幸るし申うま
之上山を土障の情よりよみて
我苑ののちさく 柵もたひ

愚考三上山とらる益士十名の一ツふ
して蜈蚣山とりふ士障十名の

ひくひくあり 既ふおもしろいなりし根
をきき傳をらうく之上の山の隅の雲
法印 堯孝

田上 山よ吉人をうそく入きくぬ
この嶽ふ丈う巖 袴 騁 とりし
なすなり

一書 小猿 九太夫 又 野 世 山 寺 へ 送 せ し て 其 の
きりふすむ 浅美曰 世名抄ふ多きなり
下よそはうとりし入所なりそそよ小猿九太夫
の墓あり名の後よそそこの書かよ書
のきくしれえ人皆志あり 一書 小名 某 某
田上よのきくふり嶽も志くるなりし方やまゆ
みのるふふしむ 後 九 条 殿
ふ津一の里をいとくろく後うそ

細代 ちよあそとよみむ万葉
集の 密ありなり

愚案 かくありなりとよめり 秋万葉及
新撰万葉もなりなり 久老 麻 善 六 太 夫
の云 古万葉 十四卷 伊賀の 上 野 山
やらむありしは 伊賀の 上 野 山
りのちよあそとよめり 伊賀の 上 野 山
申ふありしは 伊賀の 上 野 山

松の 柳 佐 りの 葉 の
よ 運 の ありし 松 の 柳 佐 りの 葉 の
を 産 産 を 表 して 猿 の 腰 掛 と 名 つ く
在 味 堂 曰 旋 斫 松 枝 架 佐 柳
彼 海 棠 小 巢 を い と る 乃 主 簿
孝 小 高 を 詠 齋 乃 王 翁 徐

佳の徒の事あり

一書小山谷集徐老海棠棠上正翁
主簿峰庵往少云徐佳樂道院於
樂律中家有海棠棠数株結其上時
与客果飲其間又王在人多採四方
歸結屋於主簿家上嘗有毛人至
其間向道愚考主簿棠と書る
非あり主簿多官名あり其の書る
ありて江西の廬陵郡ふあり未客
多とりしは多ふ五ふあり旅の卜よ
白毛を筆とりを主簿とりしは多
の色形小似し多し主簿峰と
りしあり多し主簿ふ似し多し
山こりあり

唯睡癖 山民と成て

一書小癖史曰李蒙老睡里を好み
舟人と云す小食強て皆棋を下す
蒙老を輒枕小法きて眠ふ危の數
局終る時一度展轉して云我始て
一局あり公等幾局そとりし
愚考冷齋夜話曰范堯夫小睡眠の詩
あり五雅俎曰睡を嗜む者あり邊老先
杜牧甚ふ數人皆有此癖近世張東海
有睡亟記又陸放翁睡癖の詩あり
是ハ并をとりしあり

一書小展教多山の言き教之 芝山曰
王子端待小門前剥啄定佳客磨外

麝香好山 一書小東坡拈衣步屐
教

空山小風を叩て庵中

一書小石林詩話曰青山拍風坐黃鳥
棲書眠多山者閑寂のきりあり

一書小王荊公竹拍風對青山棲書
眠北園

そよあけし心まあるる時を
のほろを汲てみはくく

炊くくくくくくくくくくく
一炉の煙くくくくくく

一書小西新上人とくくくくくく
出方の苔ほろろくくくくくく

成美曰山家集家集

よるええは或曰小幡宗甫の教う

くくくくくく住々心人の結ふ
心くく住々心人の結ふ

忌言のすきまあり一持佛一
るを構て夜ののをさむ

るきとくくくくくくくくくく
はくくくくくくを筑は京くく山

の僧正を加養の甲斐あり
表子もてくくくくくく

いふそりりたるをあら人を
て額ををいといとや守くこと

をそあて幻住庵の三字を送
らるれりて字庵の紀念とあり

一書凡か養の甲斐ありくく加養和安

後及甲斐なる。敦直と号す。安寛
永の間の能書なり。峯子来。祥号
稱してり。入りや。愚考。素白。待大。及
是。文。康。之。後。父。云。又。後。君。と。云
峯。の。イ。ツ。ク。ニ。あり。

とらふ。て。山。岳。と。り。の。猿。藤。と
云。さ。ら。器。多。く。を。入。り。て。り。
本。曾。の。核。笠。之。越。の。若。の。兼。斗
枕。の。上。の。柱。ふ。り。け。り。を。多。く。稱
し。と。り。ふ。人。の。心。を。動。し
得。る。多。宮。寺。の。義。里。の。を。の。こ。共
入。来。り。て。る。の。志。の。稱。し。の。あり
し。糸。の。更。細。の。の。り。入。り。て。り
秀。の。志。の。め。農。後。日。既。ふ。山

の。得。ふ。の。り。の。り。

一書小雲。谷雅。詠。矣。晦。齋。野。人。載。酒
来。農。終。日。已。夕。右。古。文。家。集。の。多。人。の
夜。坐。静。ふ。月。を。待。て。り。款
を。待。て。り。灯。を。亮。て。り。同。所。の
是非。を。多。く。り。

一書小夜坐。不厭。湖。上。月。一書小。在。子
亦。物。悔。日。同。所。同。糸。曰。曩。子。の。今。子。止
曩。子。坐。今。子。起。在。子。の。義。曰。同。所
彰。邊。之。終。落。者。此。時。之。非。待。彼。之
喻。也。

の。く。り。え。と。り。の。り。の。り。ふ。困
寂。を。ぬ。み。山。帶。小。跡。を。の
く。さ。む。と。り。の。り。の。り。や。

病身人ふ倦て世をいと云
し人ふ似たり情年月の
うはりあし拙き身の料を
かりふふある時を仕友を命
の限をうらやみ

一書ふ翁ち最堂家同苗仁古島門友の家
長松尾基士邸と云陪従の小角の建六
宮身をうらやみたりもむ一うらやみ
つては佛額祖室の殿ふ入
らむとせしむふくうらやみ
ゆ雲ふ身をてきめ花をうらや
を骨して驚くは誰のたりり
あしうらやみは流ふを流す
才よりしてはしむくうらやみ

之味堂曰惠能禪師 吾三十而窺佛
額祖室 一書ふ曰佛頂禪師 予冬
して探すふしし字好しりと夫
をも余ふしし終ふ也夫のるしとて
純徳の一もらふはなるうりて生涯を
終らとらり

樂天五腕の袂をやりり
老杜を瘦より
一書ふえ模寄 樂天信ふ 老遠佳
京惟潤帳 兩地 各傷無限袂
成美曰小夜の康覺ふ云良基云樂天
しりふし人々を好たりを片らり
ふきあらしふ心をうらやみてわら
よりむむのうらやみと待よふは

くらしき竹あり
飯頼山頭達一書小孝白鰲杜甫
牛乃向縁何太瘦生杜甫頭戴ハ子日卓
待苦只為従前依

賢愚文雙のむと一のうさる
ものたきさく幻の柵をくけや
とひのたけくしうしめ
一書小海徳注曰謂互尚忠尚尚
雙周尚文

先このむ枝の本もさるなまき
一書小源氏推り本の巻ふいりる木の
ていしん人まらげるりかえしあしこら
いなるまをせまままハちりいさうはり

てふとけけの年そこのさるあつた
みこるあひあひ多りと見えゆはゆら
るくとりやあてこまきとさるあさる不
いをもとけたとちまきつりまこえし
あさるまとれりあ出て意まよらむ
うげとさるの年し推り本むるしき
とこふるりあさりうまあた秋のむま
しき信とさるりしをまししとさる
のむとさるのあひさる一書小教
政の推をひるし人のあるりとするら
非るりし
おれりあさる紙帳ようげと送るり
芝山曰司る温公の布衾の終るると
よりのあひあよせり紙帳の終る

所々心入りと興へしつり又小説小白鄭
度好書若紙て意息ち持の意を
貯へて是ふ書きて樂しむ傍よふ似
しつり 愚考 家隆卿云の紫をて其の
みまふし書けりつ都みおらまはるの
やうに思ひて是をよはげてをり

教や葎の中の花うつき

愚考 白氏文集葎室中 有美人常
織 緝 罽 紵 市 又字苑よ日教ハ眉る
のるるりカホバセト 訓す

多ししし一書ふ十歌もく九月書

愚考 源氏よる多つしし一タトルるり
句人言曰 蹴 躡 るり字彙曰 蹴 歩の形なり
膳亦米や早苗のつけふ夕涼

愚考 山王交礼の供御を思す少忌小膳不
漢とけし七三の切つを思をせ、とよこしるものや
一あらるのそやき相田のそと一書

愚考 之を大坂の人山城のき相田の
麦粉をて土産とすりのりさ土産を我
玉の産物をとるすす一書 又古今集
よはの玉のるふいおのそん山城の
とらふ山城のるむるそのみおそは
玉をとりおる物をけり山城のき相
田の麦粉をるるすす一書 又古今集
賞ゆてとらふ山城のるむと心のる
の御情は初よらるるそおのふやう
あつし
一なる入 山城のるりや 旅縁を

冠笑只 任心感物 写興
而已矣

一書小漢室狙戴鵲冠笑朝市金
圈狙偷衣感流徒六の介猿の説
しやちしきして記寸小足らん

洛下逸人凡兆去来随

翁遊学謀鼓竹窓躡等

凌節斯有歲屬撰此集

玩弄無己自謂絶起狐

腋白婁者也

愚考孟嘗君の狐腋の白裘

真千金よりて天下奇貨なりを

幸娘よあつて秦の囚を逃れし

やとの名求衣有り王褒曰千金之裘

一狐之腋よりあつて狐腋の猿裘は此

名求衣より絶起すなり或人發して

云天下奇貨の白裘小賤まなりとい

ぬ何善て曰千疋の狐を殺して一人の

毫毛を乞ふるは乞ふる名聞りて宝と

すなり是よりい狐の毛を乞ふるは

兩具を乞ひて猿の毛を乞ふるは

日の福よりあつて又毛裘より義

を乞ふるは乞ふるは乞ふるは

毛を縫ふるは乞ふるは乞ふるは

よりあつて一筆の形とあつて

感よ絶よりあつて偷衣頂冠

の笑よ絶よりあつて

於是四方 喙友 憧々 往來

秋海小照一合せて歌号女義の蘊奥るるを知らし
維也元祿四拾辛未仲夏余掛
錫於洛陽旅亭偶會兆來吟席
見需記此支題各尾卒援毫不
揣拙庶幾一襄高張有補于詞
海漁人云

愚考維字彙曰凡策書の年月必維字を以發之
取之時の古字あり拾之穀一契の義小
之と音字あり書尾あり王元之曰大張一
網羅群英

